(2)は表面左端が剝離し、「日」の横に穿孔がみられる。「一日」は「百」の可能性も考えられる。

9　関係文献

尼崎市教育委員会『尼崎市内遺跡　復旧・復興事業に伴う発掘調査概要報告書』（一九九九年）

（大川勝宏）

(1)

(2)

兵庫・明石城武家屋敷跡

1　所在地　兵庫県明石市東仲ノ町・大明石町

2　調査期間　一九八六年（昭61）三月～一九八八年一〇月

3　発掘機関　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

4　調査担当者　岡田章一・長谷川真・村上泰樹・山下史朗・久保弘幸・甲斐昭光

5　遺跡の種類　近世武家屋敷跡

6　遺跡の年代　古墳時代～江戸時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

人丸山に位置する明石城の南側、中堀と外堀に挟まれた空間は、江戸時代の武家屋敷地帯であり、その名残の短冊型地割りが部分的に現存している。

現在も続けられている教次の発掘調査によって、その実態が次第に判明しつつあるが、山陽電鉄本線連続立体交差事業に伴う調査は、

（明石・須磨）

武家屋敷に対する初めての発掘調査事例であった。明石市教育委員会が確認調査を、兵庫県教育委員会が本発掘調査を実施した。本発掘調査の調査面積は約三〇〇〇㎡である。

検出された遺構は、屋敷境を始めとする溝・道路・建物・池・井戸・土坑・埋甕・埋桶などであり、江戸時代後半には上水道が敷設されていることも判明した。

これらの遺構からは、約二四〇点の木製品が出土している。漆器・桶・箸・下駄など、みな日常生活に関するものであった。

今回紹介する二点の木簡は、中・上級武家の屋敷地であった中ノ町地区から出土したものである。(1)は、溝SD三二〇二から出土したもので、一七世紀後半から一九世紀後半にかけての時期幅の広い遺物を伴う。(2)は、溝SD三一〇三から出土したが、伴出遺物がなく、江戸時代という以上に時期の限定はできない。

8　木簡の釈文・内容

溝SD三二〇二

(1)　「西江白川村源蔵　(144)×25×6　051

溝SD三一〇三

(2)　□□寺　径132×厚5　061

(1)は下端のみを尖らせる形態をもつが、その先端部を欠失する。「西江」の意味は不明であるが、明石周辺に遺称地名はないようである。「白川村」は、直線距離にして約一二㎞東北東に位置する、現在の神戸市須磨区白川を指すものか。源蔵は人名と思われる。

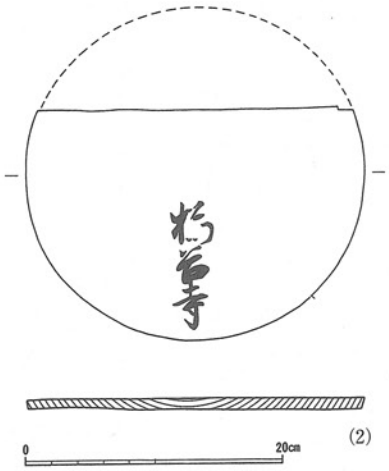
(2)は桶の蓋板と思われる円形の木製品であるが、その三分の一程度を欠失する。下半部中央に寺名が記されているものの、細部が不明なため判読できない。少なくとも、絵図などに記された明石城下の社寺名のなかに、これと一致するものはないようである。

9　関係文献

兵庫県教育委員会『明石城武家屋敷跡』(一九九二年)

(甲斐昭光)

(1)



(2)